

## 青年期における自己意識の発達に関する研究 (I)

—自己肯定性次元と自己安定性次元の検討—

平 石 賢 二

### I 問題と目的

青年期については、しばしば自我の発見 (Spranger, 1955) や自我同一性の確立 (Erikson, 1959; Erikson, 1963), 人格の再構成 (Ausubel, 1954) といったテーマが問題にされ、自己確立、自己形成の時期であることが強調されてきた。また、加藤 (1978) は、青年期の特質を自己意識の転換期、再構成期に入ることであると述べている。

この自我や自己の問題については、ふるくより様々な立場によって多くの構成概念が提出され、研究が進められている (Allport, 1943; 北村, 1977; Wylie, 1979; Rosenberg, 1979)。なかでも、Lecky (1945), Snygg & Combs (1949), Rogers (1951) そして Rogers & Dymond (1954) らを中心とする現象的自己論と呼ばれる立場では、自己意識、自己概念<sup>1)</sup>を、「個人の行動を規定する内的な準拠枠」としてとらえ、適応や心理学的健康の指標として実証的に研究を積み重ねていった。わが国においてもこの視点から数多くの研究がなされている (長島・藤原・原野・斎藤・堀, 1966; 長島他, 1967; 斎藤, 1959; 椎名, 1966)。

このように自己意識、自己概念の問題は適応や心理学的健康の指標としても重要な意味を持ったため、青年がどのように自己意識を発達させていくかという問題は青年心理学における最も重要な研究課題の1つとされるのである。

さて、青年期における自己意識の発達に関する数多く

の研究については、Wylie (1979) や Rosenberg (1986) らによる優れたレビューがある。Rosenberg (1986) は、自己概念に関する研究を2つの領域に大別して整理している。1番目は、自己概念の内容 (the content of the self-concept) であり、「人は自分自身について何を見るか」といった問題を指している。2番目は、自己概念の次元 (dimensions) であり、自己への態度の望ましさ (self-esteem) や安定性 (stability)、顕著さ (self-consciousness) などの問題を指している。このような自己概念の内容と次元という2つの分類は、従来の自己概念に関する研究結果を整理する上で重要であると思われる。Shavelson, Hubner & Stanton (1976) も、従来の自己概念研究の中では概念的にも実証的にも自己記述 (self-description) と自己評価 (self-evaluation) との区別がなされておらず、両者が相互的に使用されていたことを批判し、このような分類の重要性について触れている。

そこで、本研究においては Rosenberg (1986) の分類に従い、両者の概念的な区別を考慮しながら、自己概念の次元、とりわけ自己への態度の望ましさ (自己肯定性次元) と自己の安定性 (自己安定性次元) に焦点をあてていくことを始めに断わっておきたい。

ところで、青年期における self-esteem<sup>2)</sup> の発達に関する研究では、多くの異なった研究結果が示されてきた。Wylie (1979) は多くの研究のレビューの中で self-esteem と年齢の間には一貫した関係が例証され得なかったと結論づけている。しかし他方で、McCarthy & Hoge (1982) は、縦断的研究においてはある程度一貫して加齢に伴い self-esteem が高くなるという結果が

1) 「自己意識」、「自己概念」という用語は、研究者によって様々な定義され、必ずしも厳密に整理されていない。しかし、本研究では便宜的にこの2つの用語をほぼ同義のものとして扱うことにした。本研究における「自己意識」、「自己概念」の定義は、Rosenberg (1979) の “the totality of the individual’s thoughts and feelings having reference to himself as an object” (p. 7) に準じている。

2) “self-esteem” は自尊感情、自尊心、自己評価などと訳されている。ここでは、この用語を自己概念における評価次元 (例えば好ましい—好ましくない、望ましい—望ましくない、肯定的—否定的など) を表わす総称として用いている。そのため、本研究において扱われた自己肯定意識は、この下位概念として位置づけている。

出ているとし、注意深く検討された縦断的研究においては信頼できる結果を出し得ることを指摘している。また、Rosenberg (1986) は、McCarthy & Hoge の考えを支持しながら、青年期における self-esteem は、11歳頃より傾き始め12, 13歳頃に最も低くなり、その後は14歳頃までに徐々に改善され加齢とともに高くなっていくという仮説を立てている。そして、その変化は部分的には学校状況の変化に依存していることを指摘している。

柏木 (1983) は、self-esteem の発達に関する研究を概観し、「そもそも自己尊重、自己受容といった事柄に、一般的な発達的变化を想定することがどだい検討しがちなのだと思う」(p.93-94)、「自己尊重、自己受容の問題は一般的な発達よりも、その差をもたらす要因の解明と、どうすることによって望ましい方向にそれを変容させられるかといった臨床的実践(カウンセリングに限らず、青年自身の自己形成を含めて)の問題なのだと思う」(p.95)と述べている。そして、一般的な発達的变化以上に、それぞれの子どもの self-esteem の個人差の由来や背景を探ることを重視し、「年齢、学年の異なるいくつかの群をつないでその変化をみる横断的資料ではなく、縦断的追跡調査によって、その子どもに生じたどのような環境上の変化や経験が自己概念の変化と対応しているかが、もっと確かめられなければならない」(p.95)と述べている。柏木の主張は青年期における self-esteem の問題が、個人レベルでの発達的变化という視点から研究する必要があると言い換えることが出来るかもしれない。いずれにせよ、測定の方法論的な問題として、しばしば指摘されている尺度の信頼性と構成概念的妥当性の問題、サンプリングの問題などが解決された上で、発達の是非を論じる必要があることには間違いない。

自己安定性次元も同様に、self-esteem が発達的に変化していくものか、それとも安定しているものかという研究の枠組み中で扱われてきており (Engel, 1959; Carlson, 1965; O'Malley & Bachman, 1983; Savin-Williams & Demo, 1983), 研究間での一致した見解は得られず、上述の論議の中にあるのが現状である。Mortimer, Finch, & Kumka (1982) は、安定性に関する統一された定義がないことを第一の問題とし、安定性を4つのタイプ (Structural Invariance, Normative Stability, Level Stability, Ipsative Stability) にまとめている。また、Rosenberg (1986) は、自己概念の比較的变化しやすい面と、変化しにくい面とを区別し、前者を barometric self-concept, 後者を baseline self-concept と呼び、安定性を研究する際には、どちらが問題にされているかを考慮しなければならないとした。

以上に述べてきたように、青年期における自己意識・自己概念、とりわけ self-esteem の発達や安定性に関する研究は、定義の不統一の問題に由来する、測定された構成概念の多様さや、測定の方法論的な問題からかなり混乱している状況にあると考えられる。そのため、この領域の研究者たちはこれらの問題を整理しながら個々の研究の意味づけを行なわなければならない。わが国においても、自己意識・自己概念の発達に関する数多くの研究が存在するが、このような構成概念上の整理や測定論上の問題に触れながら、体系的にデータを蓄積している研究は未だ少ないと考えられる。そこで、本研究においては、このような問題意識から、青年期における自己意識の2つの次元 (自己肯定性次元と自己安定性次元) の発達を研究することにする。本論文においては、研究の第1段階として両次元の発達を横断的調査によってとらえ、その基礎的な分析結果を報告することを目的とする。

## II 方 法

### 1. 尺度の作成<sup>3)</sup>

#### (1) 自己肯定意識尺度 (表2, 表3を参照)

自己肯定性次元を測定する尺度としては、平石 (1987), 平石 (1988), そして平石 (1990) において使用されている尺度を短縮化し、用いることにした。この尺度は本来、健康性の次元として肯定性-否定性の次元を想定し作成されたものである。そのため、本研究において取り扱われるべき自己肯定性次元を測定するのに妥当な尺度であると考えられた。

短縮化の手続きは次の通りである。まず始めに、平石 (1990) における調査データを元に尺度項目全体を対自己領域、対他者領域の2つの領域別に主成分分析 (主成分分解-プロマックス回転) を行なった。その結果、対自己領域においては5つの主成分が抽出され、それぞれ、自己実現的態度主成分、不決断・自己不信感主成分、充実感主成分、自己受容主成分、非現実感・衝動性主成分と命名された。また、対他者領域においては4つの主成分が抽出され、それぞれ、内閉性・人間不信主成分、自

3) 本研究における調査では、自己意識の発達に関連要因として、重要な他者による評価に対する意識を設定し、それを新たに作成した文章完成法テストによって測定し、関連を検討することにした。しかし、本論文においては紙数の都合上、青年期における自己意識の2つの次元の発達に関する基礎的な分析結果を報告するだけにとどめておくことにする。具体的な質問項目については、付録を参照していただきたい。

己表明・対人的積極性主成分，被評価意識・対人緊張主成分，対家族関係主成分と命名された。

次に，抽出された主成分の示している自己意識の内容面について検討し，その結果本研究においては以下の6つが選出された。括弧内はその主成分の示す自己意識の内容の主な側面である。そして，それぞれに対して主成分負荷の高い項目を選び，各主成分毎に8項目ずつ，合計48項目の構成とした。また，本研究においては中学生も調査対象とするため，項目の表現について若干の修正をし，また一部項目を新たに書き加えることにした。

- 対自己領域：自己受容（評価意識的側面）  
 自己実現的態度（動機的側面）  
 充実感（感情的側面）
- 対他者領域：自己閉鎖性・人間不信（感情的側面）  
 自己表明・対人的積極性（対人行動的側面）  
 被評価意識・対人緊張（評価意識的側面）

(2) 自己安定性尺度（表4を参照）

自己安定性次元を測定する尺度としては，Rosenberg (1979) の Stability of Self Scale (New York State) を参考にし，5項目から構成されている日本語版自己安定性尺度を作成した。これによって測定される安定性は，自己意識の比較的变化しやすい面に関する安定性であり，Rosenberg (1986) の言う，barometric self-concept の側面を測定するものである。

2. 調査対象および調査実施方法

(1) 調査対象および調査実施期間

調査対象については表1を参照されたい。表1に示される対象数は，本論文における分析の対象となった人数である。意図的に回答を歪めて作成したと判断された調査回答や，拒否的で空欄の多い調査回答は分析から除外することにした。調査実施期間は，1990年6月中旬から7月中旬である。

(2) 調査実施方法

調査は集団で実施した。大学生においては，筆者が授業中に行い，中学生，高校生においては，調査実施方法を記したマニュアルを添え学校側に実施を依頼した。調査に要した時間は，おおよそ25分から40分までであり，中学生，高校生，大学生間でそれほど大きな差は認められなかった。

回答形式は，自己肯定意識尺度では，“あてはまる”，“どちらかといえばあてはまる”，“どちらともいえない”，“どちらかといえばあてはまらない”，“あてはまらない”の5段階評定尺度であり，それぞれ順に1点，2点，3

表1 調査対象

学校および学年\性別	男子	女子	合計
国立大学附属A中学校 3年生	36	39	75
名古屋市立B中学校 3年生	99	73	172
合計	135	112	247
国立大学附属C高校 2年生	56	63	119
愛知県立D高校 2年生	70	103	173
合計	126	166	292
私立E大学 1年生	64	12	76
2年生	3	—	3
私立F大学 1年生	107	24	131
2年生	5	—	5
私立G女子大学 1年生	—	—	—
2年生	—	56	56
私立H女子大学 1年生	—	—	—
2年生	—	70	70
合計	179	162	341

点，4点，5点の配点とした。また，自己安定性尺度では，“ある”，“ときどきある”，“あまりない”，“ない”の四肢選択，“よく変わる”，“ときどき変わる”，“あまり変わらない”，“変わらない”の四肢選択，“そう思う”，“ややそう思う”，“あまりそう思わない”，“そう思わない”の四肢選択で行なった。それぞれ，順に1点，2点，3点，4点の配点とした。質問に際しての指示は，どちらの尺度においても「現在の自分自身にとってあてはまると思われるもの」を選択するように指示した。

3. 分析方法

本論文においては，中学生，高校生，大学生における調査結果を，相互に比較することによって自己意識における発達的变化の分析を行なう。本論文で報告するのは，以下の2つの基礎的な分析結果である。

(1) 各質問項目毎の項目得点間の比較

各質問項目毎に中学生，高校生，大学生の各群間の平均値の差の検定を行なう。ここでは，各下位尺度毎，すなわち自己肯定意識尺度6，自己安定性尺度1の合計7尺度毎に2要因（年齢×性）の多変量分散分析を行い，その後各項目毎に2要因分散分析を行なうことにする。また，有意差の認められた主効果，交互作用に対してテューキー法による多重比較を行なった。

表2 自己肯定意識尺度(対自己領域)の各項目における平均、標準偏差および分散分析の結果

下位尺度名、項目番号および項目内容\学年、性別	中 学				高 校				大 学				主 効 果		交 互 作 用				
	男		女		男		女		男		女		学 年 差	性 差					
	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N							
自己 受 容																			
1. 欠点のひとっやふたつあってもかまわないと思う。	1.61	0.94	135	1.63	0.90	112	1.48	0.87	126	1.49	0.83	165	1.42	0.79	179	1.33	0.64	162	
2. 自分なりの個性を大切にしている。	1.82	1.00	134	2.09	1.02	111	1.81	1.02	125	1.99	0.99	165	1.89	0.94	179	1.82	0.85	162	
24. 自分の個性を素直に受け入れている。	2.16	1.07	134	2.49	1.10	112	2.43	1.11	125	2.47	1.08	166	2.34	1.11	178	2.20	1.01	160	* 中女>中男
33. 自分には良い面が全然ない。(*)	3.96	1.14	134	3.27	1.21	112	3.42	1.13	126	3.36	1.07	166	3.83	1.12	178	3.92	0.96	162	*** 中男>中女
38. 自分の悪いところが気になってしまう。(*)	2.62	1.47	134	2.22	1.25	111	2.51	1.25	126	2.17	1.12	166	2.35	1.20	178	2.51	1.18	160	** 中男>中女
40. やれば何かできるというそんな自信がある。	2.01	1.14	134	2.21	1.11	112	2.25	1.21	124	2.47	1.12	164	2.19	1.16	177	2.15	1.04	162	
44. 私には私なりの人生があっていいと思う。	1.47	0.84	135	1.71	1.04	112	1.48	0.79	126	1.46	0.74	166	1.40	0.69	178	1.37	0.61	162	
48. 自分の良いところも悪いところもありのままに認めることができる。	2.13	1.24	135	2.35	1.17	112	2.29	1.18	126	2.32	1.08	166	2.29	1.21	177	2.14	1.01	162	
自己実践的態度																			
4. 自分には目標というものが無い。(*)	3.80	1.39	133	3.62	1.38	110	3.41	1.38	125	3.35	1.34	162	3.37	1.38	178	3.80	1.20	162	* 中女>大男
6. 張り合いがあり、やる気が出ている。	2.67	1.15	133	2.98	1.12	112	3.01	1.23	125	3.16	1.03	165	3.05	1.13	179	2.80	1.00	160	**
9. 自分を足失うことなく自分の道を進んでいる。	2.37	1.05	134	2.88	1.15	112	2.81	1.07	126	2.84	1.04	166	2.87	1.14	179	2.60	1.01	161	*** 中女>中男
15. 自分の夢をかなえようと思えて燃えている。	2.43	1.21	134	2.81	1.29	112	2.67	1.17	125	2.98	1.20	165	2.99	1.18	178	2.78	1.11	160	** 中女>中男
22. 本当に自分のやりたいことが何なのか分からな い。(*)	3.39	1.46	135	2.84	1.50	112	2.85	1.48	126	2.47	1.39	165	2.50	1.35	179	2.84	1.42	161	*** 中男>中女
27. 自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている。	2.10	1.11	134	2.49	1.07	111	2.44	1.09	126	2.58	1.04	165	2.41	1.12	179	2.33	1.01	161	* 中女>中男
30. 前向きな姿勢で物事に取り組んでいる。	2.46	1.13	134	2.76	1.08	112	2.71	1.03	126	2.88	1.03	165	2.73	1.21	178	2.43	1.01	162	** 大男>大女
31. 情熱をもって何かに取り組んでいる。	2.62	1.24	133	2.93	1.21	111	2.78	1.15	125	3.11	1.18	163	2.94	1.28	179	2.85	1.14	162	*
充 実 感																			
7. 生活がすごく楽しいと感じる。	2.54	1.25	134	2.62	1.28	112	2.94	1.20	125	3.02	1.16	166	2.99	1.09	178	2.62	1.10	162	* 大男>大女
10. わなあまりがなく、スカッとしている。	2.54	1.17	134	3.04	1.21	111	2.91	1.07	126	3.12	1.13	164	3.16	1.18	179	3.06	1.11	162	** 女>男
19. 精神的に楽な気分である。	2.59	1.36	134	3.03	1.28	111	2.94	1.22	125	3.20	1.21	164	2.91	1.24	179	2.87	1.22	162	* 女>男
26. 満足感ももてない。(*)	3.14	1.44	134	2.93	1.35	112	2.92	1.29	126	2.65	1.18	165	2.75	1.30	178	3.27	1.22	162	*** 大女>大男
29. 自分の好きなことがやれていると思える。	2.31	1.29	134	2.75	1.30	112	2.68	1.22	126	3.01	1.19	166	3.13	1.32	179	2.53	1.10	161	*** 中女>中男、大男>大女
42. 充実感を感じる。	2.95	1.19	133	3.14	1.07	111	3.10	1.17	124	3.39	1.06	165	3.23	1.15	177	2.86	1.01	162	*** 大男>大女
45. ここから楽しいと思えるHがない。(*)	4.02	1.27	134	3.89	1.29	111	3.63	1.42	126	3.55	1.29	165	3.64	1.28	178	4.05	1.06	162	* 大女>大男
47. 自分はのびのびと生きていると感じる。	2.56	1.32	133	2.88	1.22	111	2.57	1.13	124	2.90	1.14	165	2.87	1.16	178	2.47	1.10	162	*** 大男>大女

注: (\*) 印は逆転項目を示している。しかし、本表における転点では、他の項目と同様に逆転させていない。\*はP<.05, \*\*はP<.01, \*\*\*はP<.001で有意。

## (2) 各尺度毎の主成分構造間の比較

各尺度毎、すなわち自己肯定意識尺度、自己安定性尺度のそれぞれについて主成分分析（主成分解—プロマックス回転）を行い、主成分構造間の比較を行なう。但し、自己肯定意識尺度においては、対自己領域と対他者領域を本来区別しているため、別々に分析することにする。また、調査対象数の問題から、性別による分析は行わないことにした。

## III 結 果

### 1. 各尺度における各質問項目毎の項目得点間の比較<sup>4)</sup>

#### (1) 自己肯定意識尺度（対自己領域）

自己肯定意識尺度の対自己領域における各質問項目の平均と標準偏差、ならびに2要因分散分析の結果は、表2に示されるとおりである。24項目全体での多変量分散分析の結果、学年の要因 ( $F_{(48,1594)} = 2.66, P. < .0001$ )、性の要因 ( $F_{(24,797)} = 2.01, P. < .003$ )、交互作用 ( $F_{(48,1594)} = 1.59, P. < .0068$ ) のすべてにおいて有意な差が示された。以下に各下位尺度毎に結果を検討していきたい。

#### ①自己受容

自己受容に関する項目では、項目38を除くすべてにおいて、平均値は肯定的な傾向が示されていた。

各項目毎の分散分析の結果では、項目2と項目48を除いた6つの項目において有意差が示された。学年差については、「大学生は中学生に比べ、自己受容傾向が高い（項目1, 33, 44）」、「大学生は高校生に比べ、自己受容傾向が高い（項目33）」、「中学生は高校生よりも自己受容傾向が高い（項目33, 40）」といった結果が示された。性差については、項目33においてのみ、男子が女子よりも自己受容傾向が高いことが示された。交互作用については、3つの項目（項目24, 33, 38）において有意差が認められたが、いずれも「中学生男子は中学生女子に比べ自己受容傾向が高い」ことを示していた。

#### ②自己実現的態度

自己実現的態度に関する項目では、項目6, 22, 31を除く5つの項目において、平均値はすべて肯定的な傾向を示していた。しかし、項目6においては、高校生の男女と、大学生の男子において僅かに否定的な傾向が示されていた。また、項目22における高校生の男女と大学生の男女、項目31における高校生の女子の平均値が否定的な傾向を示していた。

4) 配点の関係上、平均値は低いほどその項目内容の傾向を表わしている。

各項目毎の分散分析の結果では、すべての項目において有意差が示された。学年差については、「中学生は高校生に比べ、自己実現的態度の傾向が高い（項目4, 6, 15, 22）」、「中学生は大学生に比べ、自己実現的態度の傾向が高い（項目15, 22）」、「大学生は高校生に比べ、自己実現的態度の傾向が高い（項目30）」といった結果が示された。また、交互作用については、すべての項目において有意差が認められた。しかし、テューキー法による多重比較の結果では、項目6,31では有意差が認められていない。有意差が認められた交互作用については、「中学生男子は中学生女子に比べ、自己実現的態度の傾向が高い（項目9, 15, 22, 27）」、「大学生女子は大学生男子に比べ、自己実現的態度の傾向が高い（項目4, 30）」といった結果が示された。

#### ③充実感

充実感に関する項目では、2つの項目（項目45, 47）において、平均値はすべて肯定的な傾向を示していた。他の6つの項目に関しては、中学生女子4項目（項目10, 19, 26, 42）、高校生男子2項目（項目26, 42）、高校生女子6項目（項目7, 10, 19, 26, 29, 42）、大学生男子4項目（項目10, 26, 29, 42）、大学生女子1項目（項目10）において、平均値は否定的な傾向を示していた。

各項目毎の分散分析の結果では、すべての項目において有意差が示されていた。その結果、学年差では、「中学生は高校生に比べ、充実感傾向が高い（項目7, 10, 19, 26, 29, 42, 45）」、「中学生は大学生に比べ、充実感傾向が高い（項目7, 10, 29）」、「大学生は高校生に比べ、充実感傾向が高い（項目42, 45）」といった結果が示された。また、性差に関しては、2つの項目において「男子は女子に比べ、充実感傾向が高い（項目10, 19）」といった結果が示された。そして、交互作用に関しては、「大学生女子は大学生男子に比べ、充実感傾向が高い（項目7, 26, 29, 42, 45, 47）」、「中学生男子は中学生女子に比べ、充実感傾向が高い（項目10, 29）」といった結果が示された。

#### (2) 自己肯定意識尺度（対他者領域）

自己肯定意識尺度の対他者領域における各質問項目の平均と標準偏差、ならびに2要因分散分析の結果は、表3に示されるとおりである。24項目全体での多変量分散分析の結果、学年の要因 ( $F_{(48,1584)} = 3.16, P. < .0001$ )、性の要因 ( $F_{(24,792)} = 3.56, P. < .0001$ )、交互作用 ( $F_{(48,1584)} = 1.49, P. < .0172$ ) のすべてにおいて有意な差が示された。以下に各下位尺度毎に結果を検討していきたい。

#### ①自己閉鎖性・人間不信

自己閉鎖性・人間不信に関する項目では、すべての平

表3 自己肯定意識尺度(対他者領域)の各項目における平均、標準偏差および分散分析の結果

下位尺度名、項目番号および項目内容\学年、性別	中 学				高 校				大 学				主 年 差		果 性 差		交 互 作 用				
	男		女		男		女		男		女		学 年 差	性 差	性 差						
	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N									
自己閉鎖性・人間不信																					
3. 自分はひとりぼっちだと感じる。	4.25	1.12	133	3.66	1.32	112	3.52	1.38	125	3.31	1.30	163	3.44	1.28	179	3.78	1.14	162	*** 中>高, 中>大		*** 中男>中女, 大女>大男
5. 自分は他人に対してどこかを閉ざしているような気がする。	3.89	1.23	133	3.75	1.21	112	3.55	1.32	124	3.34	1.29	164	3.46	1.31	178	3.76	1.13	161	** 中>高		*
12. 人間関係をわずらわしいと感じる。	3.49	1.25	134	3.39	1.31	110	3.25	1.33	125	3.04	1.28	161	3.16	1.27	177	3.50	1.17	162	*	中>高	* 大女>大男
14. 友だちと一緒にいてもどこかさびしく悲しい。	4.24	1.20	134	3.85	1.31	112	3.80	1.33	125	3.45	1.30	164	3.70	1.28	179	3.85	1.21	162	*** 中>高		* 中男>中女, 高男>高女
18. 他人に対して好意的になれない。	3.95	1.06	130	3.80	1.01	112	3.57	1.16	126	3.67	1.02	166	3.93	1.00	178	4.25	0.83	162	*** 中>高, 大>高		* 大女>大男
20. 他人との間に壁をつくっている。	3.90	1.18	133	3.59	1.23	111	3.51	1.22	123	3.39	1.18	165	3.49	1.25	176	3.56	1.14	161	*	中>高	
23. 私は人を信用していない。	3.96	1.23	134	3.85	1.11	112	3.54	1.31	125	3.55	1.16	166	3.65	1.24	178	4.04	1.04	162	*** 中>高, 大>高		* 大女>大男
28. 友人と話している時も全然通じないで絶望している。	4.26	1.14	134	3.97	1.18	112	3.90	1.17	126	3.93	1.11	166	4.12	0.98	178	4.41	0.87	162	*** 大>高		* 大女>大男
自己表明・対人的積極性																					
8. 人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる。	2.60	1.22	134	2.84	1.18	112	2.80	1.29	125	2.99	1.14	165	2.97	1.14	176	2.80	1.21	162			
11. 人前でもありのままの自分を出せる。	2.71	1.12	134	2.86	1.21	112	2.81	1.16	124	3.05	1.16	164	3.04	1.23	179	2.77	1.19	162			*
17. 友だちと真剣に話し合う。	2.83	1.38	134	2.33	1.18	112	2.67	1.16	126	2.23	1.14	166	2.49	1.19	177	1.91	0.96	162	*** 中>大		*** 男>女
36. 自分のなっとくのいくまで相手と話し合うようにしている。	2.75	1.26	133	2.95	1.27	112	2.98	1.21	126	3.07	1.12	164	3.14	1.15	177	2.78	1.19	161			** 大男>大女
37. 友だち関係が自然と広がっていく。	2.19	1.17	135	2.38	1.20	112	2.42	1.14	126	2.48	1.18	165	2.56	1.13	177	2.22	1.02	160			*
39. 自主的に友人に話しかけっていく。	2.28	1.29	135	2.14	1.09	111	2.48	1.15	125	2.51	1.14	166	2.54	1.14	178	2.32	1.04	160	*	高>中	
43. 相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる。	2.39	1.20	133	2.65	1.15	112	2.70	1.09	125	2.58	1.07	165	2.44	1.12	177	2.31	1.05	160	*	高>大	
46. 疑問だと感じたらそれを堂々と言える。	2.81	1.18	134	2.98	1.14	111	2.81	1.08	125	3.02	1.07	164	3.09	1.07	178	2.85	1.10	159			*
概評意識・対人緊張																					
13. 他人に自分の良いイメージだけを印象づけようとしている。	3.04	1.21	134	3.07	1.12	112	2.93	1.24	126	3.01	1.06	164	2.74	1.19	177	3.11	1.08	161			* 女>男
16. 自分が他人の目にとどくかを意識すると身動きできなくなる。	3.31	1.44	135	2.97	1.39	112	3.05	1.24	126	2.82	1.23	162	3.03	1.33	176	3.45	1.25	162	*	大>高	*** 大女>大男
21. 人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている。	3.13	1.40	134	2.88	1.34	112	2.92	1.28	126	2.76	1.16	164	2.78	1.25	176	3.08	1.35	160			*
25. 人に向かって思ったことが言えないでいることがある。	2.77	1.30	134	2.82	1.36	112	2.66	1.30	125	2.62	1.33	163	2.57	1.28	178	2.97	1.28	162			*
32. 人から何かが言われないか、変な目で見られないかと気にしている。	2.99	1.46	135	2.75	1.37	112	2.80	1.32	126	2.55	1.18	164	2.69	1.24	177	2.98	1.27	161			*
34. 自分は他人よりおどっているかすぐれていているかを感じている。	2.99	1.37	134	3.13	1.33	112	3.14	1.27	125	2.90	1.19	165	2.85	1.19	177	3.15	1.24	162			*
35. 無理して人に合わせようとしてきゅうくつな思いをしている。	3.47	1.37	134	3.47	1.30	112	3.16	1.25	125	3.05	1.23	166	3.31	1.14	179	3.62	1.13	162	*** 中>高, 大>高		
41. 人に気をつかいつぎてつかれる。	3.35	1.31	133	3.25	1.31	111	2.84	1.20	125	2.99	1.22	164	2.82	1.17	178	3.17	1.18	161	*** 中>高, 中>大		

注: \*は P<.05, \*\*は P<.01, \*\*\*は P<.001 で有意。

均値が肯定的な傾向を示していた。

また、各質問項目毎の分散分析の結果においては、すべての項目に有意差が認められた。そのうち、学年差に関する結果としては、「高校生は中学生に比べ、自己閉鎖性・人間不信の傾向が高い(項目3, 5, 12, 14, 18, 20, 23)」, 「高校生は大学生に比べ、自己閉鎖性・人間不信の傾向が高い(項目18, 23, 28)」, 「大学生は中学生に比べ、自己閉鎖性・人間不信の傾向が高い(項目3)」といったことが示唆された。そして、交互作用に関しては、「中学生女子は中学生男子に比べ、自己閉鎖性・人間不信の傾向が高い(項目3, 14)」, 「大学生男子は大学生女子に比べ、自己閉鎖性・人間不信の傾向が高い(項目3, 12, 18, 23, 28)」, 「高校生女子は高校生男子に比べ、自己閉鎖性・人間不信の傾向が高い(項目14)」といった結果が示唆された。項目5においては、5%水準で交互作用が有意であったが、チューキー法による多重比較の結果では、有意差は認められなかった。

②自己表明・対人的積極性

自己表明・対人的積極性に関する項目では、高校生女子の3項目(項目11, 36, 46)と、大学生男子の3項目(項目11, 36, 46)において、否定的な傾向が示されたのを除くと、すべての項目で平均値は肯定的な傾向を示していた。

そして、各項目毎の分散分析の結果では、7つの項目において有意差が認められた。しかし、項目11, 46は交互作用において5%水準の有意差が認められたが、チューキー法による多重比較の結果では有意差は認められなかった。そのうち、学年差に関する結果としては、「大学生は中学生に比べ、自己表明・対人的積極性の傾向が高い(項目17)」, 「中学生は高校生に比べ、自己表明・対人的積極性の傾向が高い(項目38)」, 「大学生は高校生に比べ、自己表明・対人的積極性の傾向が高い(項目43)」といったことが示唆された。そして、性差に関しては、「女子は男子に比べ、自己表明・対人的積極性の傾向が高い(項目17)」, 交互作用に関しては、「大学生女子は大学生男子に比べ、自己表明・対人的積極性の傾向が高い(項目36, 37)」といった結果が示された。

③被評価意識・対人緊張

被評価意識・対人緊張に関する項目では、項目35を除く、すべての項目で平均値は否定的な傾向を示していた。特に、中学生男子は2項目(項目32, 34), 中学生女子は4項目(項目16, 21, 25, 32), 高校生男子は5項目(項目13, 21, 25, 32, 41), 高校生女子は6項目(項目16, 21, 25, 32, 34, 41), 大学生男子は6項目(項目13, 21, 25, 32, 34, 41), そして大学生女子は2項目(項目25, 32)においてその傾向が示されている。

表4 自己安定性尺度の各項目における平均、標準偏差および分散分析の結果

項目番号および項目内容\学年、性	中 学				高 校				大 学				主 年 差		果 差		交 互 作 用								
	男		女		男		女		男		女		学 年 差	性 差											
	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	N													
1. ある時には、自分について良い見方をしているが、また別の時には自分について悪い見方をしているようなことがありますか。	2.17	0.91	134	2.04	0.78	112	2.11	0.90	126	1.93	0.75	165	1.84	0.71	162	1.72	0.68	179	2.01	0.83	162	*** 中>大, 高>大		*	
2. あなたは自分自身についての見方が、以前とは変わっていることに気がつくことがありますか。	2.40	1.06	133	2.45	0.96	112	2.30	0.95	126	2.07	0.96	164	2.06	0.93	179	2.39	0.74	179	2.85	0.93	179	*** 中>高, 中>大			
3. あなたの自分自身についての見方はよく変わる方ですか。それとも同じまままで変わらない方ですか。	2.55	0.85	134	2.62	0.75	112	2.51	0.86	126	2.43	0.83	166	2.39	0.74	179	2.85	0.93	179	2.86	0.90	162				
4. 今、自分についてもっている見方は変わることがないと思いますか。(*)	2.72	0.99	134	2.75	0.91	112	2.82	0.94	126	2.76	0.95	166	2.85	0.93	179	2.44	0.95	179	2.51	0.94	162				
5. あなたは自分自身の考えがすぐに変わること気がつくことがありますか。	2.71	1.02	134	2.68	0.89	112	2.62	0.90	126	2.40	0.91	166	2.44	0.95	179								*	中>高, 中>大	

注: (\*)印は逆転項目を示している。しかし、本表における配点では、他の項目と同様に逆転させていない。\*はP<.05, \*\*はP<.01, \*\*\*はP<.001で有意。

表5 自己肯定意識尺度 (対自己領域) におけるプロマックス回転後の主成分負荷行列

下位尺度名, 項目番号および項目内容\学年, 全体	中 学			高 校			大 学			全 体		
	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III
	共通性			共通性			共通性			共通性		
自己 受 容												
1. 欠点のひとつやふたつあってもかまわないと思う。	.27	-.24	.12	.086								
2. 自分なりの個性を大切にしている。	-.15	.33	.59	.508	.24	.01	.60	.511	.09	.02	.69	.528
24. 自分の個性を素直に受け入れている。	.11	.18	.57	.497	.06	.14	.63	.495	.05	.07	.69	.535
33. 自分には良い面が全然ない。(*)	-.42	-.07	-.30	.390	-.16	-.23	-.36	.327	-.11	-.18	-.52	.429
38. 自分の悪いところが気になってしまう。(*)	-.42	.34	-.41	.330	.52	-.57	-.23	.372	.32	-.44	-.15	.191
40. やれば何かできるというそんな自信がある。	-.07	.43	.37	.387	.55	-.05	.31	.483	.36	-.09	.44	.363
44. 私には私なりの人生があってもいいと思う。	-.04	-.04	.67	.414	.06	-.17	.64	.397	.07	-.09	.60	.363
48. 自分の良いところも悪いところもありのままに認め ることができる。	.02	.09	.61	.419	.06	.12	.61	.460	.01	.17	.60	.454
自己実現的態度												
4. 自分には目標というものが無い。(*)	.03	-.71	.01	.476	-.65	.10	-.11	.424	-.79	.25	-.13	.540
6. 張り合いがあり、やる気が出ている。	.38	.48	-.14	.498	.63	.28	-.17	.570	.61	.31	-.13	.616
9. 自分を見失うことなく自分の道を進んでいる。	.21	.36	.34	.488	.14	.30	.24	.264	.36	.19	.32	.444
15. 自分の夢をかなえようと意欲に燃えている。	-.23	.83	.05	.581	.82	-.08	-.00	.608	.73	-.06	.04	.512
22. 本当に自分のやりたいことが何なのか分からない。(*)	-.08	-.45	-.15	.319	-.50	-.15	-.02	.351	-.67	-.01	-.03	.465
27. 自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている。	.04	.64	.08	.473	.67	-.09	.23	.546	.56	-.12	.32	.441
30. 前向きな姿勢で物事に取り組んでいる。	.32	.59	.02	.637	.63	.22	.10	.631	.60	.17	.12	.559
31. 情熱をもって何かに取り組んでいる。	.10	.73	.02	.629	.80	.08	-.01	.706	.72	.14	-.05	.619
充 実 感												
7. 生活がすごく楽しいと感じる。	.66	.23	-.14	.580	.39	.58	-.18	.625	.39	.57	-.15	.635
10. わだかまりがなく、スカットしている。	.63	-.12	.31	.532	-.11	.60	.20	.409	-.13	.71	.21	.548
19. 精神的に楽な気分である。	.68	-.04	.09	.484	-.16	.83	-.01	.584	-.14	.73	.14	.521
26. 満足感がもてない。(*)	-.83	.12	.03	.599	-.04	-.71	.04	.518	-.23	-.63	.08	.575
29. 自分の好きなことがやれていると思える。	.55	.33	-.05	.560	.24	.58	-.10	.482	.38	.43	-.08	.455
42. 充実感を感じる。	.57	.28	.04	.579	.32	.57	-.04	.568	.48	.52	-.14	.689
45. ことから楽しいと思える日がない。(*)	-.73	-.14	.24	.579	-.31	-.46	-.01	.438	-.16	-.55	-.03	.435
47. 自分はのびのびと生きていると感じる。	.58	.15	.25	.578	.26	.55	.07	.538	.27	.49	.17	.552

注: (\*) 印は逆転項目を示している。しかし、本表における配点では、他の項目と同様に逆転させていない。

資 料

各項目毎の分散分析の結果では、7つの項目で有意差が認められた。しかし、項目21, 32, 34では5%水準で交互作用が有意であったものの、チューキー法による多重比較の結果では有意差は認められなかった。有意差が認められた項目のうち、学年差に関しては、「高校生は大学生に比べ、被評価意識・対人緊張の傾向が高い(項目16, 35)」, 「高校生は中学生に比べ、被評価意識・対人緊張の傾向が高い(項目35, 41)」, 「大学生は中学生に比べ、被評価意識・対人緊張の傾向が高い(項目41)」といった結果が示唆された。また、性差に関しては、「男子は女子に比べ、被評価意識・対人緊張の傾向が高い(項目13)」, 交互作用に関しては、「大学生男子は大学生女子に比べ、被評価意識・対人緊張の傾向が高い(項目16)」ことが示唆された。

(3) 自己安定性尺度

自己安定性尺度における各質問項目の平均と標準偏差、ならびに2要因分散分析の結果は、表4に示されるとおりである。

各項目における平均値は、項目4においては安定性の傾向が示されていたが、他の4つの項目においては不安定性の傾向が示されていた。

5項目全体での多変量分散分析の結果、学年の要因(F(10,1732)=4.55, P.<.0001)において有意な差が示された。また、その後の各項目毎の分散分析の結果においては、3つの項目(項目1, 2, 5)において有意差が認められた。そのうち、学年差に関する結果としては、「高校生は中学生に比べ、不安定な傾向が高い(項目2, 5)」, 「大学生は中学生に比べ、不安定な傾向が高い

表6 自己肯定意識尺度(対自己領域)におけるプロマックス回転後の主成分間相関行列

主成分\学年	中 学		高 校		大 学		全 体	
	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ
I	.48	.31	.46	.33	.51	.27	.51	.31
Ⅱ		.34		.27		.30		.30

(項目1, 2, 5)」, 「大学生は高校生に比べ、不安定な傾向が高い(項目1)」といったことが示唆された。交互作用に関しては、項目1において5%水準で有意差が認められたが、チューキー法による多重比較の結果では、有意差は認められなかった。

2. 各尺度毎の主成分構造間の比較

(1) 自己肯定意識尺度(対自己領域)

自己肯定意識尺度の対自己領域における主成分分析の結果、中学、高校、大学、全体のそれぞれにおいて3主成分が抽出された。結果は、表5に示されるとおりである。学年による主成分構造の違いを見てみると、自己受容に関する項目のうち、項目1, 33, 38, 40の4つにおいては、学年によって若干負荷量の違いが認められる。

表8 自己肯定意識尺度(対他者領域)におけるプロマックス回転後の主成分間相関行列

主成分\学年	中 学		高 校		大 学		全 体	
	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ
I	.41	-.37	.29	-.38	.35	-.36	.37	-.38
Ⅱ		-.33		-.26		-.26		-.30

表9 自己安定性尺度における主成分負荷行列

項目番号および項目内容\学年	中 学		高 校		大 学		全 体	
	I	共通性	I	共通性	I	共通性	I	共通性
1. ある時には、自分について良い見方をしているが、また別の時には自分について悪い見方をしているようなことがありますか。	.62	.382	.65	.422	.57	.321	.62	.385
2. あなたは自分自身についての見方が、以前とは変わっていることに気がついたことがありますか。	.79	.622	.74	.545	.66	.437	.73	.540
3. あなたの自分自身についての見方はよく変わる方ですか。それとも同じままで変わらない方ですか。	.83	.684	.83	.696	.75	.569	.80	.647
4. 今、自分についてもっている見方は変わることがないと思いますか。(*)	-.29	.085	-.40	.158	-.58	.338	-.44	.194
5. あなたは自分自身の考えがすぐに変わることに気がついたことがありますか。	.70	.486	.72	.517	.74	.550	.72	.521
固 有 値	2.26		2.34		2.21		2.29	

注：(\*)印は逆転項目を示している。しかし、本表における配点では、他の項目と同様に逆転させていない。

表7 自己肯定意識尺度 (対他者領域) におけるプロマックス回転後の主成分負荷行列

下位尺度名, 項目番号および項目内容\学年, 全体	中学			高校			大学			全体		
	I	II	III	共通性	I	II	III	共通性	I	II	III	共通性
自己閉鎖性・人間不信												
3. 自分はひとりぼっちだと感じる。	.57	.14	-.17	.529	.70	.07	-.06	.556	.67	.14	.05	.513
5. 自分は他人に対してどこを閉ざしているような気がする。	.70	-.07	-.08	.504	.72	.04	-.09	.594	.66	.01	-.14	.522
12. 人間関係をわずらわしいと感じる。	.71	.00	.09	.472	.70	-.01	.13	.426	.68	.05	.15	.435
14. 友達と一緒にいてもどこかさびしく悲しい。	.55	.25	-.07	.533	.73	.14	-.01	.620	.66	.22	.00	.578
18. 他人に対して好意的になれない。	.51	.14	-.15	.428	.59	-.12	-.23	.468	.61	-.04	-.16	.451
20. 他人との間に壁をつくっている。	.73	.16	.04	.629	.76	.03	-.00	.600	.71	.06	-.04	.567
23. 私は人を信用していない。	.76	-.16	-.02	.511	.70	-.07	-.02	.475	.75	-.07	.05	.501
28. 友人と話しているだけでも全然通じないので絶望している。	.57	.20	-.07	.503	.71	.11	.07	.522	.62	.14	.01	.467
自己表明・対人的積極性												
8. 人前でもどこでも自由になく自由に感じたままを言うことができる。	.21	-.37	.62	.560	.14	-.27	.70	.585	.19	-.26	.71	.585
11. 人前でもありのままの自分を出せる。	.06	-.28	.63	.549	.07	-.29	.64	.558	.01	-.26	.63	.552
17. 友達と真剣に話し合う。	-.29	.32	.56	.432	-.11	.15	.57	.351	-.19	.23	.56	.372
36. 自分のなっとくのいくまで相手と話し合うようにしている。	-.15	.08	.52	.325	-.16	.24	.61	.434	-.10	.12	.63	.408
37. 友だち関係が自然と広がっていく。	-.19	-.02	.59	.483	-.35	.06	.56	.556	-.38	.08	.51	.513
39. 自主的に友人に話しかけていく。	-.02	.11	.74	.513	-.17	.18	.67	.520	-.22	.20	.64	.499
43. 相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる。	-.08	-.05	.62	.452	-.06	-.10	.67	.532	-.08	-.06	.65	.500
46. 疑問だと感じたならそれを堂々と伝える。	.10	-.11	.66	.445	.21	-.08	.71	.453	.16	-.10	.73	.504
被評価意識・対人緊張												
13. 他人に自分の良いイメージだけを印象づけようとしている。	.05	.48	-.04	.271	-.07	.68	.04	.434	.04	.56	.03	.324
16. 自分が他人の目にとどめるかを意識すると身動きできなくなる。	.06	.69	-.04	.535	.15	.67	.00	.523	.08	.68	-.05	.531
21. 人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている。	.11	.80	.22	.638	-.04	.82	.05	.646	.01	.77	-.04	.623
25. 人に向かって思ったことが言えないことがある。	-.13	.63	-.18	.434	-.10	.44	-.40	.403	-.18	.34	-.49	.372
32. 人から何か言われたいか、変な目で見られたいか、気にしている。	.03	.83	.05	.688	-.09	.85	-.03	.700	-.04	.76	-.05	.585
34. 自分は他人よりおとっているか、すくなくれているかを気にしている。	-.05	.52	-.16	.330	.06	.69	.03	.487	.14	.62	.07	.441
35. 無理して人に合わせようとしてきゅうくつな思いをしている。	.31	.52	-.02	.507	.41	.59	.03	.636	.22	.59	-.11	.549
41. 人に気がつかないで済むかつかれる。	.33	.45	.14	.387	.29	.55	.03	.467	.06	.68	.00	.488

しかし、他の自己実現的態度と充実感に関しては、項目42を除けばほぼ同一の主成分構造を示していると考えることができる。

表6は、主成分分析の結果、得られた主成分間の相関行列である。中学生の第Ⅰ主成分と第Ⅱ主成分はそれぞれ、他の高校生、大学生、全体の第Ⅱ主成分と第Ⅰ主成分に対応する違いはあるものの、相関パターンにさほど違いは認められなかった。

### (2) 自己肯定意識尺度 (対他者領域)

自己肯定意識尺度の対他者領域における主成分分析の結果、中学、高校、大学、全体のそれぞれにおいて3主成分が抽出された。結果は、表7に示されるとおりである。項目25, 35, 37, 39の4項目については、学年によって若干の負荷量の差が認められる。しかし、その他の項目に関してはいずれの学年においても、同一の主成分構造を示しており、同じ内容の主成分を抽出していると考えられる。

表8は、主成分分析の結果、得られた主成分間の相関行列である。主成分Ⅰと主成分Ⅱとの相関係数の大きさに学年差が若干認められるが、ほぼ同一の相関パターンを示していると考えることができる。

### (3) 自己安定性尺度

自己安定性尺度の主成分分析の結果は、表9に示されるとおりである。結果として、いずれの学年においても1つの主成分が抽出されている。また、学年による主成分負荷量の違いは、特に項目4において認められた。

## IV 考 察

### 1. 自己意識における自己肯定性次元の発達

自己肯定意識に関する分析結果を要約すれば、「中学生と大学生は、高校生に比べ、肯定的な自己意識をもっている」といえる。中学生と大学生との関係に関しては、内容領域によって有意差が認められるものの、どちらが肯定的であるとは判断しがたい結果が示されていた。このU字形の発達曲線は、宮沢(1978)が、自己受容性の年齢的変容について、「中学生と大学生の間では変容がほとんどみられないか、あるいは中学生の方が大学生よりも自己受容的であると思える」(p.106)と述べていることや、加藤(1962)が、中学1年生から高校1年生にかけての自己受容性の減少と、高校2年生から大学2年生にかけての自己受容性の増大を指摘していることと一致した傾向を示している。平石(1988)は、本研究において使用された尺度の元となる尺度を用いて、高校生と大学生における自己意識の発達差を調査した。そこでの結果は、高校生から大学生にかけて、男子の場合は直線的に肯定的な自己意識をもつようになるのに対して、女

子の場合は大学生になり若干否定的な時期を迎えるというものであった。この結果は、性差を除けば、本研究におけるデータと一致している。

また、Rosenberg(1979)は、児童期における安定して満足された自尊感情は、思春期に入り不安定なものとなるが、青年期の後期に入ると改善されてくることを指摘している。このような、自己意識の変化は、青年の自己意識における転換期、再構成の時期の存在を示唆しているように思われる。しかしながら、本研究において示された年齢段階と、Rosenbergの指摘したそれとの間にはずれが認められる。

他方、発達差と性差の交互作用に関しては、中学生においては男子が女子よりも肯定的であり、大学生においては逆に女子の方が男子よりも肯定的であるという結果が示されていた。本研究においては、性差の規定要因を検討していないため、この結果に対する解釈を与えることはできないが、性差を発達の視点からとらえる必要があることは示唆されている。

主成分構造の結果は、発達差に関係なくほぼ同一の主成分構造を示しており、このことによって尺度の因子的妥当性が検討されたと考えられる。上記に示したような項目得点からみた発達差は、このような尺度における意味構造の共通性の基盤の存在によって支えられている。

つまり、ほぼ同一の意味を理解しながら、なお学年間に得点差が存在する原因、それに関与している要因を検討することが求められるのである。

### 2. 自己意識における自己安定性次元の発達

自己安定性尺度においても、尺度は単一主成分構造を示していることが確認された。

発達差に関しての、結果を要約すれば、「中学生、高校生、大学生間では、中学生が最も安定した自己を認知しており、高校生、大学生が順にそれに続いている」ということが出来る。

ここで示される発達の变化は、自己肯定性におけるU字形とは異なり直線的であり、漸次、不安定さを増大させていく姿を示している。この自己安定性は、既に述べられたように自己意識の比較的变化しやすい面に関するものであり、しかも、青年に認知された自己の安定性である。その意味で、これは認知発達の側面が関連していると考えられる。Rosenberg(1979)は、自己概念における認知的側面の発達は、外面的なものから内面的なものへ、具体的なものから抽象的なものへ、と変化することを指摘している。このように、認知された自己の側面は認知発達の影響を多分に受けていると考えられる。そのため、ここで示される認知された自己の安定性にお

ける発達差は、今後更にそれらの視点から吟味されなければならない。

### 3. 今後の課題

本研究においては、自己意識における2つの次元性に関する発達を検討した。しかし、ここでの報告は、項目レベルでの検討と主成分構造の確認に留まっており、尺度としての信頼性と妥当性に関する検討は行なわれていない。また、次元間の関係および内容領域間の関係についても検討されないままになっている。

既に指摘したように、自己意識の発達は認知的発達の影響を多分に受け、その上で更に社会化、社会性の発達の過程と同じ道筋にあるものと考えられる。その意味で、青年の自己意識の発達は、青年の人格全体の再構成の過程の中で位置づけなければならず、関連するあらゆる要因を考慮し、解釈する必要がある。

また、先に示された調査結果についても、それが確定的な発達傾向と断定することは出来ず、本研究におけるサンプリングの問題や測定法の影響を受けている可能性も考えられる。そのため、今後も追試を行い、また縦断的研究などの別の方法論を併用することによって結果を確かなものにしていく必要がある。

しかしながら、本研究は「問題と目的」で述べた通り、研究の第1段階である。本論文においては、割愛されたが、本調査においては、文章完成法形式の尺度を用いて、重要な他者の評価に対する意識の測定も試みられている。そのため、第II報においては、自己肯定性次元と自己安定性次元、および重要な他者の評価との関連を発達の視点から検討していくことにする。また、その際には、個人差の検討も同時に行なうことにする。

## 文 献

- Allport, G. W. 1943 THE EGO IN CONTEMPORARY PSYCHOLOGY *Psychological Review*, 50, 451-478.
- Ausbel, D. P. 1954 *Theory and Problems of Adolescent Development*. New York : Grune & Stratton.
- Carlson, R. 1965 STABILITY AND CHANGE IN THE ADOLESCENT'S SELF-IMAGE. *Child Development*, 36, 659-666.
- Engel, M. 1959 THE STABILITY OF THE SELF-CONCEPT IN ADOLESCENCE. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 58, 211-215.
- Erikson, E. H. 1959 "Identity and the Life Cycle", *Psychological Issues. Monograph I*. New York : International Universities Press.
- Erikson, E. H. 1963 *Childhood and Society* 2nd ed. New York : W. W. Norton.
- 平石賢二 1987 青年期における精神的健康に関する一研究 - 青年期版精神健康意識調査票作成の試み - 昭和61年度名古屋大学教育学部修士論文 (未公開)
- 平石賢二 1988 青年期における健康な自己意識の発達差 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 502-503.
- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造 - 自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康 - 教育心理学研究, 38, 320-329.
- 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- 加藤隆勝 1962 青年期における自己受容と自己批判の年齢的変容について 岐阜大学学芸学部研究報告 (人文科学), 11, 83-89.
- 加藤隆勝 1978 自己意識の発達に関する研究の現状と課題 東京教育大学教育学部紀要 (第1部), 24, 117-124.
- 北村晴朗 1977 新版 自我の心理 誠信書房
- Lecky, P. 1945 *Self-consistency : A theory of personality*. New York : Island Press.
- McCarthy, J. D. & Hoge, D. R. 1982 Analysis of Age Effects in Longitudinal Studies of Adolescent Self-Esteem. *Developmental Psychology*, 18, 372-379.
- 宮沢秀次 1978 青年期における自己受容性の一研究 名古屋大学教育学部紀要 - 教育心理学科 -, 25, 105-117.
- Mortimer, J. T., Finch, M. D., & Kumka, D. 1982 Persistence and Change in Development : The Multidimensional Self-Concept. In Baltes, P. B. & Brim, Jr., O. G. (Eds.) *Life-Span Development and Behavior. Vol. 4* New York : Academic Press.
- 長島貞夫 藤原喜悦 原野広太郎 斎藤耕二 堀洋道 1966 自我と適応の関係についての研究 (1) - Self-Differential 作製の試み - 東京教育大学教育学部紀要, 12, 85-91.
- 長島貞夫 藤原喜悦 原野広太郎 斎藤耕二 堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究 (2)

- Self-Differential 作製— 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-67.
- O'Malley, P. M. & Bachman, J. G. 1983 Self-Esteem : Change and Stability Between Ages 13 and 23. *Developmental Psychology*, 19, 257-268.
- Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy*. Boston : Houghton.
- Rogers, C. R. & Dymond, R. F. (Eds.) 1954 *Psychotherapy and personality change*. Chicago : University of Chicago Press.
- Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the Self*. New York : Basic Books.
- Rosenberg, M. 1986 Self-Concept From Middle Childhood Through Adolescence. In Suls, J. & Greenwald, A. G. (Eds.) *PSYCHOLOGICAL PERSPECTIVES on the SELF Vol. 3* New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates.
- 斎藤久美子 1959 自己意識の分析による人格適応性の一研究 心理学研究, 30, 277-285.
- Savin-Williams, R. C. & Demo, D. H. 1983 Conceiving or Misconceiving the Self : Issues in Adolescent Self-Esteem. *Journal of Early Adolescence*, 3, 121-140.
- Shavelson, R. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. 1976 Self-Concept:Validation of Construct Interpretations. *Review of Educational Research*, 46, 407-441.
- 椎名信治 1966 適応の指標としての自己概念の研究 教育心理学研究, 14, 165-172.
- Snygg, P. & Combs, A. W. 1949 *Individual behavior: An new frame of reference for psychology*. New York: Harper.
- Spranger, E. 1963 *Psychologie des Jugenalters* 27 Aufl. Heidelberg:Quelle & Meyer. (原田茂訳 1973 青年の心理 協同出版)
- Wylie, R. C. 1979 *THE SELF-CONCEPT revised edition Vol.2 Theory and Research on Selected Topics*. Lincoln:University of Nebraska Press.

(1990年8月30日 受稿)

青年の意識調査

調査のお願い：

私どもは、「青年の意識」に関する総合的な研究をすすめております。

今回は、中学生から大学生までを調査対象とし、若者が自分や他者に対して日頃どのように考え、感じているかお聞きすることになりました。

調査された個々の回答につきましては、コンピュータによって分析され、あとあとご迷惑のかかることは決してありません。また、テストではありませんので正しい答えや間違った答えというものはありません。お手数とは思いますが、率直なご回答をよろしくお願いいたします。

1990年6月

名古屋大学教育学部  
教育心理学教室  
平 石 賢 二

調査実施日： 平成2年 月 日  
学 校 名： 学年： クラス：  
性 別： 男 ・ 女

I. 以下に48個の質問項目があります。それぞれの文章をよく読んで、それが現在の自分自身にとってどのくらいあてはまるかを考え、最も適していると思われるところに○印をつけてください。やり残しのないよう、48個すべてについてお答えください。

(例)

あてはまる  
どちらかといえは  
どちらともいえない  
あてはまらない  
どちらかといえは  
どちらともいえない  
あてはまらない

正しい記入例      どんな人とも仲良くする。 ○

誤った記入例      どんな人とも仲良くする。 ○

あてはまる  
どちらかといえは  
あてはまらない  
どちらかといえは  
どちらともいえない  
あてはまらない

1. 欠点のひとつやふたつあってもかまわないと思う。
2. 自分なりの個性を大切にしている。
3. 自分はひとりぼっちだと感じる。
4. 自分には目標というものが無い。
5. 自分は他人に対してところを閉ざしているような気がする。
6. 張り合いがあり、やる気が出ている。
7. 生活がすごく楽しいと感じる。

あてはまる  
どちらかといえは  
どちらともいえない  
どあてはまる  
どあてはまらない

8. 人前でもこだわらなくなり自由に感じたままを言うことができる。
9. 自分を見失うことなく自分の道を進んでいる。
10. わだかまりがなく、スカッとしている。
11. 人前でもありのままの自分を出せる。
12. 人間関係をわずらわしいと感じる。
13. 他人に自分の良いイメージだけを印象づけようとしている。
14. 友だちと一緒にいてもどこかさびしく悲しい。
15. 自分の夢をかえなようと意欲に燃えている。
16. 自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる。
17. 友だちと真剣に話し合う。
18. 他人に対して好意的になれない。
19. 精神的に楽な気分である。
20. 他人との間に壁をつくっている。
21. 人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている。
22. 本当に自分のやりたいことが何なのか分からない。
23. 私は人を信用していない。
24. 自分の個性を素直に受け入れている。
25. 人に向かって思ったことが言えないでいることがある。
26. 満足感もてない。
27. 自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている。
28. 友人と話していても全然通じないので絶望している。

あてはまる  
どちらかといえは  
どちらともいえない  
どあてはまる  
どあてはまらない

29. 自分の好きなことがやれていると思える。
30. 前向きな姿勢でものごとに取り組んでいる。
31. 情熱をもって何かに取り組んでいる。
32. 人から何か言われないか、変な目で見られないかと気にしている。
33. 自分には良い面が全然ない。
34. 自分は他人よりおとっているかすぐれているかを気にしている。
35. 無理して人に合わせようとしてきゅうくつな思いをしている。
36. 自分のなっとくのいくまで相手と話し合うようにしている。
37. 友だち関係が自然と広がっていく。
38. 自分の悪いところが気になってしまう。
39. 自主的に友人に話しかけていく。
40. やれば何かできるといふような自信がある。
41. 人に気をつかいすぎでつかれる。
42. 充実感を感じる。
43. 相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる。
44. 私には私なりの人生があってもいいと思う。
45. ころから楽しいと思える日がない。
46. 疑問だと感じたならそれを堂々とと言える。
47. 自分のはびと生きていて感じる。
48. 自分の良いところも悪いところもありのままに認めることができる。

齶

脊

II. 以下に5個の質問項目があります。それぞれの質問について、現在の自分自身にとってあてはまえると思われる答えを○印で囲ってください。

1. ある時には、自分について良い見方をしているが、また別の時には自分について悪い見方をしているようなことがありますか。  
 ある    ときどきある    あまりない    ない
2. あなた自分自身についての見方が、以前とは変わっていることに気がついたことがありますか。  
 ある    ときどきある    あまりない    ない
3. あなたの自分自身についての見方はよく変わる方ですか。それとも同じままで変わらない方ですか。  
 よく変わる    ときどき変わる    あまり変わらない    変わらない
4. 今、自分についてもっている見方は変わることがないと思いますか。  
 そう思う    ややそう思う    あまりそう思わない    そう思わない
5. あなたは自分自身についての考えがすぐに変わることに気がついたことがありますか。  
 ある    ときどきある    あまりない    ない

III. 以下に12個の書きかけの文章が並んでいます。それを見て、あなたが日頃考えたり、感じていることをすぐつづけて書き、文章を完成させてください。どのようなことでもかまいません。

1. 友だちは私のことを、  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_
2. 私のことを一番知っている人は、\_\_\_\_\_です。  
 その人は私のことを、  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_
3. 私が誇りに思うのは、  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_
4. 自分のことをだめだと思うのは、  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_
5. 私の尊敬している人は、\_\_\_\_\_です。  
 その人は私のことを、  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_
6. 自信 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_
7. 私のまわりの人たちは私のことを、  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_
8. 私が気になっている人は、\_\_\_\_\_です。  
 その人は私のことを、  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_

- 9. 父は私のことを、  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_
- 10. よく私は、  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_
- 11. 他人の評価  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_
- 12. 母は私のことを、  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

ご協力ありがとうございました。この調査に関してのご感想・ご意見がありましたら以下の空欄に書いてください。

**ABSTRACT**

**A Study on the Development of Self-Consciousness in Adolescence ( I )**

— An examination of two dimensions of self-consciousness

(positive-negative, stable-unstable) —

Kenji HIRAISHI

The purpose of the present study was to investigate the development of self-consciousness in adolescence, especially the development of two dimensions of self-consciousness(positive-negative, stable -unstable). The subjects were 247 junior high school students (135 males and 112 females), 292 high school students (126 males and 166 females), and 341 college students (179 males and 162 females). And they were administered a questionnaire consisted of three scales (Self-Positiveness Scale, Self-Stability Scale, and The Scale for Perceived Self by Significant Others). In the present article, however, we reportd on the former two scales.

Major findings were as follows:

- 1) Junior high school students and college students had more positive self-consciousness than high school students.
- 2) Amog junior high school students, Males had more positive self-consciousness than females. On the contraly, females had more positive self-consciousness than males among college students.
- 3) Junior high school students perceived the most stable self among three groups. And next was high school students.
- 4) Factor Structures on the self-consciosness (both self-positivenss and self-stability) were common among three groups.